

香取遺産

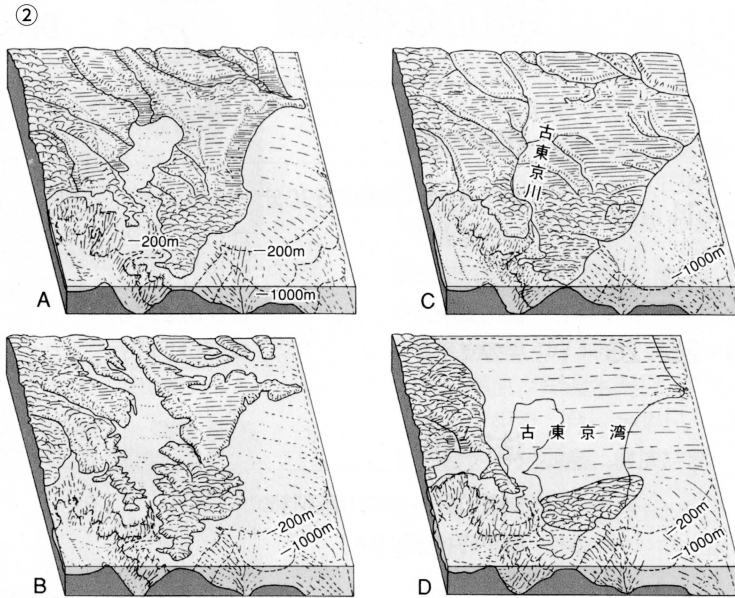
vol.142

— 香取市の地形 — 「12万年前は海の底」



①大塚山古墳

②関東平野の変遷を示す立体古代地図 A.現在 B.縄文前期(約6,000年前) C.最後の氷期の海面最大低下期(約2万年前、先土器時代) D.最後の間氷期の海面最大上昇期(12万年前)



出典 貝塚爽平・成瀬洋・太田陽子(1985)日本の平野と海岸(日本の自然4).226頁, 岩波書店.

香取市の地形は大きく分けると、台地、急傾面、低地から成り立ち、その形成時期はそれぞれ異なっています。市内の最高標高は市の東部・岡飯田地区の台地上で52メートル、千葉県の最高標高は愛宕山(南房総市)の408メートルで、全国で最も最高標高が低い県であり、全国的に見て極めて起伏の小さい土地と言えます。そこでどうやってこの三つの要素からなる景色ができたのか、地形の歴史を辿ってみましょう。

市内で人類の痕跡が確認される時期よりも前、12万年前の地球は温暖な気候でした。現在よりも海水面が高く、香取市を含め関東平野南部には海が広がっていました。その後、寒冷化により陸上に多量の氷河が形成され、海水面が低下します。これにより市内で最も低い地形である台地の原型が出来上がります。

約2万年前は氷期という寒冷化のピークで、現在よりも海水面が120メートルほど低かったと言われています。この時、現在の低地に深い谷が刻まれ、台地の周囲はほとんど削られて急傾面が形成されました。

約10万年をかけて寒冷化した後、約1万年で急激に温暖化していきます。氷河が溶けることで海面が上昇し、約6000年前の縄文時代前

期は現在よりも海水面が数メートル高く、深い谷は海の入江となります。これ以降、阿玉台貝塚をはじめ、城ノ台貝塚(木内)や鶴崎貝塚など多くの縄文時代の貝塚が台地斜面部に形成されます。

その後の寒冷化により再び海水面が低下し、谷の奥まで入り込んでいた海水が引いて、平坦な低地が形成され、現在に至っています。低地には河川的作用による微高地(自然堤防)がありますが、そこには三ノ分目大塚山古墳や富田1号墳などの古墳や集落も営まれました。

私たち人間の視点から見ると、地形は自然災害や人の手を加えないと変わらないと思われがちですが、より大きな時間の中での変化を経て、現在の地形が形成されているのです。そして人々はこれらの地形を巧みに利用しながら暮らしてきました。

関生涯学習課文化財班 ☎(50)12224

